

外国にルーツのある生徒への支援 ——学習言語能力に焦点をあてて——

学籍番号 229211
氏名 古月 大輝
主指導教員 庭山 和貴
副指導教員 岡田 和子

1. 本実践課題研究の背景

1.1 実習校について

文部科学省(2021)によると、公立学校における日本語指導が必要な生徒(日本国籍を含む)は10年間で1.5倍(平成20年度:33,470人、平成30年度51,126人)増加している。日本語指導が必要な児童生徒の学校別在籍状況(都道府県別)においても、在籍者数の多い順に愛知県、神奈川県、東京都、千葉県に次いで大阪府が位置している。

本研究では、外国にルーツのある子どもの支援について勤務校である大阪市立T中学校での学校実習を通して行った。T中学校では、韓国・朝鮮や中国、フィリピンなど外国にルーツをもつ子どもが多く在籍している。実習校における外国にルーツのある生徒の人数は年々増加傾向にあり、今後も増加が予想され、それぞれがもつ課題も多様化し、支援を必要とする状況にあった。

2. 学校実習における実践内容と結果

2.1 基本学校実習Ⅰ

基本学校実習Ⅰでは、外国にルーツをもつ生徒がどのような課題をもっているのか把握するために、臼井・照屋(2018)の「外国人児童生徒のつまずきの種類(①日本語力支援を必要とするつまずき、②教科学習支援を必要とするつまずき、③文化的相違への配慮を必要とするつまずき、④心のケアを必要とするつまずき)」を参考に授業中や休み時間の観察や、保護者との面談を通して、どの点が特につまずきであると考えられるのかアセスメントを行った。アセスメントの結果から、特に①日本語力支援を必要とするつまずきと、②教科学習支援を必要とするつまずきに課題がみられると考えられることが分かった。

2.2 基本学校実習Ⅱ

基本学校実習Ⅱでは、基本学校実習Ⅰで行ったアセスメントの結果を踏まえて、実習校で勤務している教員が外国にルーツのある生徒に対してどの点が特に課題であると考えているのかを把握するために教員アンケートを実施した。教員アンケートは臼井・照屋(2018)の「外国人児童生徒のつまずきの種類」にある4つのつまずきに「アイデンティティ形成の支援を必要とするつまずき」を加えた5つのつまずきの中から特に課題だと考えられる上位3つを選ぶ

形式を採用した。実習校で勤務している教員 20 名アンケートを実施した結果、9 割の教員が①本語力支援を必要とするつまずきと、②教科学習支援を必要とするつまずきに回答していたことが分かり、自身のアセスメントと実習校で勤務している教員が外国にルーツをもつ生徒に対して感じている課題が同じであるということが分かった。

2.3 発展課題実習 I

発展課題実習 I では、基本学校実習 II で行った教員アンケートの結果を踏まえて、外国にルーツをもつ生徒の学習言語能力を把握するために、英語科の授業内で学習言語能力テストを実施した。まず、英語科の授業内で使われる日本語の用語をバトラー後藤（2010）の研究を参考に「学習言語語彙リスト」としてまとめ、Google フォームで語彙の意味を問う問題を作成し、学習言語能力テストとして生徒の正答率を測定した。学習言語能力テストを実施した結果、外国にルーツをもつ生徒は外国にルーツをもたない生徒よりも正答率が低いことが分かった。また、学力に課題がみられる生徒は外国にルーツをもつ生徒よりもさらに正答率が低いことから、外国にルーツをもつ、もたないに問わず支援が必要であることが分かった。

2.4 発展課題実習 II

発展課題実習 II では、学習言語能力テストの結果をもとに生徒の学習言語能力を向上させるために英語科の授業を中心に支援を行うことにした。特に語彙力の向上に向けて、3C 学習法と刺激ペアリング手続きを用いて外国にルーツのある生徒、外国にルーツのない生徒にかかわらず支援を行った。3C 学習法を用いた支援では、外国にルーツのある生徒はルビを見ながら学習を進めることができたり、学力に課題がみられる生徒も自ら進んで学習に取り組んだりした。刺激ペアリング手続きを使った支援では、外国にルーツのある生徒がスライドを見ながら声に出したり、ノートに英単語を書いたりするなど前向きに学習に取り組む姿が見られた。これらの支援を行いながら、学習言語能力テストを実施し、生徒の正答率を再度測定した。学習言語能力テストの結果、前回に比べて全体の正答率が向上していることが分かった。特に外国にルーツのある生徒の正答率の平均が大幅に向上した。一方で、学力に課題がある生徒の正答率は全体の正答率に比べて低いことが分かった。

3. 総合考察

本実践課題研究では、主に外国にルーツのある生徒を対象に生徒がもつ課題はどのようなものがあるのかを分析し、日本語能力並びに学力に課題を抱えている状況を把握することができた。また、教員アンケートから実習校の教員も外国にルーツのある生徒に対して同様の課題を抱えていると考えていることが分かった。また、先行研究を踏まえて、学習言語能力テストを実施し、生徒が学習言語能力を十分に身につけられていないこともわかった。学習言語能力の向上に焦点をあてて、3C 学習法や刺激ペアリング手続きを用いて英語科の授業中の指導や補習指導などを行ったり、授業内において外国にルーツのある生徒に言語称賛など生徒にポジティブなフィードバックを行ったりした結果、再度実施した学習言語能力テストの結果に改善がみられたことからこれらの支援が有効であったと考えられる。